

ボランティア(市民活動)に関する意識調査結果報告書

2012年7月17日

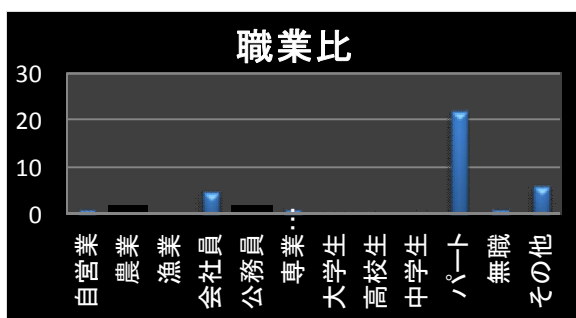
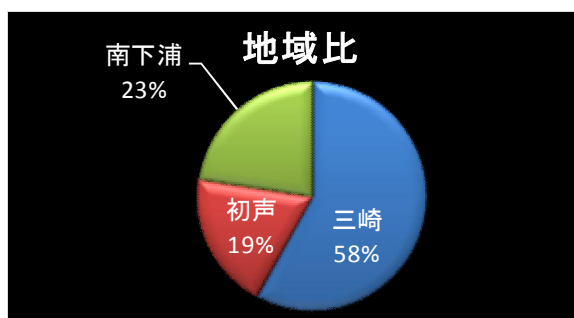
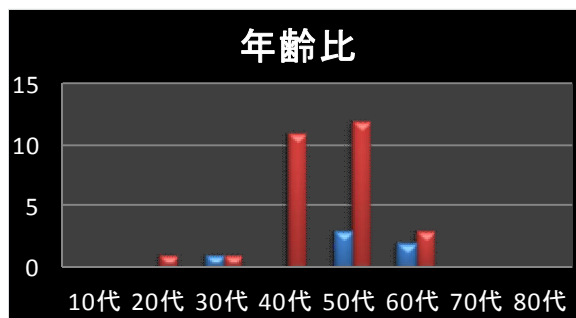
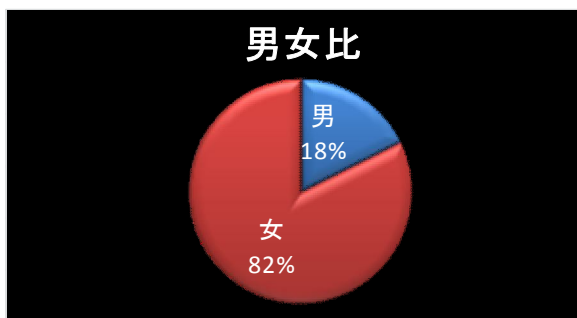
現在、三浦市民生活向上会議ボランティア活動推進部会では、ボランティア(市民活動)の振興策として①ヒト(人材育成)②モノ(施設・設備、活動場所)③カネ(活動資金)④情報(収集発信)⑤ボランティアセンターの充実—の5つの柱を想定している。そこで、この想定が、有効であるか否かを実証的に明らかにするためにアンケート調査を実施することとなった。

アンケート用紙原案を作成した事務局では、被調査者の負担感を減らせるよう、おおよそ10分程度で回答ができ、かつ、興味を引く工夫として「漫画」によるアンケート用紙を試作した。主人公である「ボラ君」の様々な経験を通して、社会問題を発見し、これに関与する様が一種の成長物語として語られていく。それを被調査者が追体験することによって「アンケートに回答する」ようになっているわけだ。なお、調査用紙(調査票)は①未活動経験者用と②活動経験者用に分け、それぞれに「属性(プロフィール)」と「設問」を設けている。

なお、本報告書の被調査者は、三浦市社会福祉協議会の職員である。それも調査用紙②の対象となる活動経験者である。



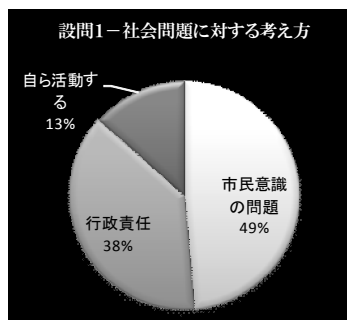
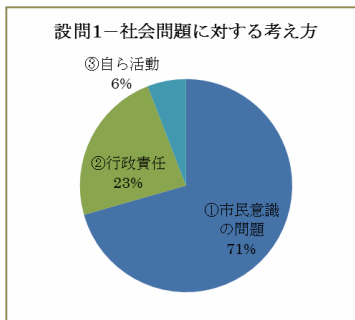
1 基本的属性



本調査における被調査者の基本的属性は上グラフのとおり。ほぼ未経験者と同様の傾向を示した。

2012年7月17日

問1 社会問題に対する考え方(設問数:1)



未経験者用アンケートと同様、直面する社会問題に対する意識について質問した。

狙いは、未経験者との課題に対する「意識の差」を顕在化することにある。

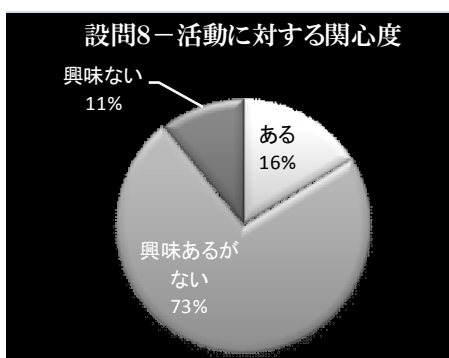
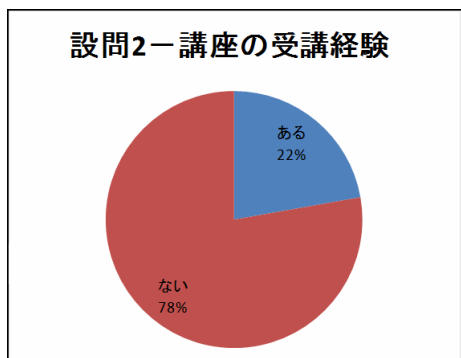
本設問において我々は、未経験者に比べると、「自ら活動する」人が多いのではないか—という仮説をたてた。何らかの課題を発見したとき、これまでの経験から、課題の解決に向けて実際に活動する人が、未経験者よりも多いと考えたからである。

結果、「自ら活動する」とした人は6%で、未経験者の半分にも満たなかった。経験者・未経験者ともに「市民一人ひとりの意識の問題」とする回答が最も多かったわけだが、その傾向は経験者により顕著に表れた(未経験者より約20%多い)。

経験者からすると、自ら解決する、あるいは、行政に整備を求めるというよりは、その多くが住民の責任感に基づく問題であり、その意識から根本的に変えていかなければ解決できない問題であるという判断に至ったのかもしれない。

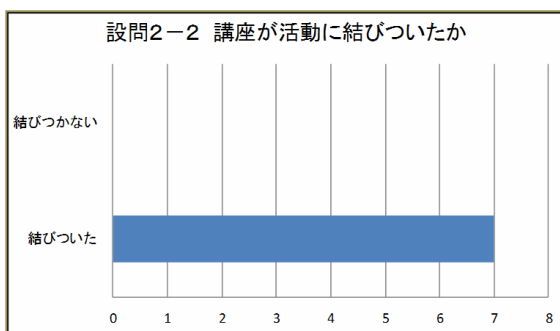
本設問において我々は、未経験者に比べると、「自ら活動する」人が多いのではないか—という仮説をたてた。

問2 「人材育成」について(設問数:3)



ボランティア関連講座の受講経験の有無と、「受講経験者」に「講座が実際の活動に結び付いたか」を尋ねた。

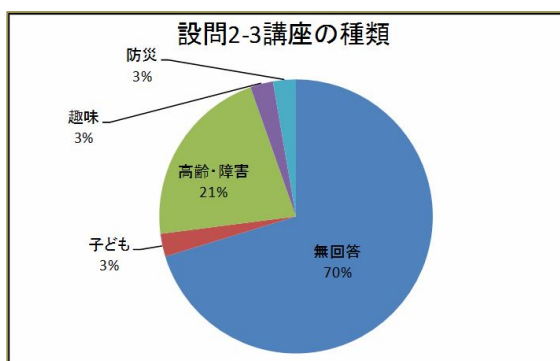
狙いは、講座の受講率と活動を始める「きっかけ」として、それが有効なのかどうかを知ることにある。



この設問において我々は、講座は実際の活動に少なからず貢献するものの、しかし、実際に受けたことがある人は少ないのではないか—という仮説をたてた。

結果は予想どおり、受けたことのない人が8割弱を占めた。受けたことがある人は、経験者・未経験者ともに、それぞれ2割程度で、

2012年7月17日



その割合に大きな差はない。

「興味はあるけど…」という当該者を受講に導くことができていない - というのが、現行の講座の実態である。

但し、このデータだけをみると、母数は少ないが、講座が、実際の活動に結び付いていることがわかる。一方で、未経験者のうち、受講経験がありながらも、実際の活動に結び

付いていない者の割合が、経験者のそれと近似していることから、経験者の場合、その前提として、強い関心と意欲があったからこそ、活動に結び付いたのであって、講座そのものが、活動を始める動機に影響を及ぼしてはいない - と考えるほうが自然かも知れない。したがって、これらの講座は、ボランティアを始める「きっかけ」としての有効性は低いと考える。

なお、本設問において、今後受けてみたい講座についても尋ねた。

狙いは、講座を企画するにあたって、具体的なニーズを探ることにある。

まず我々は、希望するテーマについて、玉石混淆ながらも、東日本大震災の影響もあり、防災系の講座に関心が集まるのではないかと - という仮説をたてた。また、受けたい講座が明確にある人が多いのではないかと考えた。

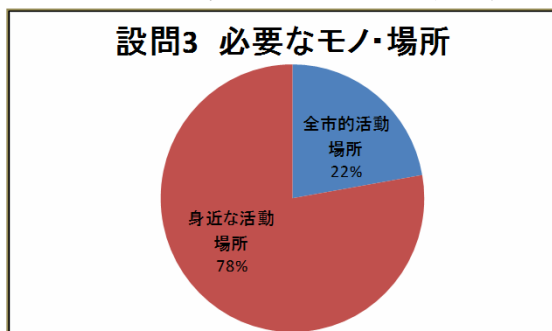
結果、7割が無回答。回答があった3割については、興味がばらけた。

どのような講座を希望するのか、人気があるジャンルや具体的な興味は掴めなかった。

具体的にいくつか候補をあげて、選んで貰うアンケートにすれば意見を聞きやすかったかもしれないが、今強く「これを学びたい！」というものは特になんかということが分かった。情報が届いてから初めて「そんなものがあるなら…時間も合うし…〇〇も来るし…受けてみようかな…」という、軽い気持ちで受けることになるのかもしれない。

従って、今後、何であれ開催することになったら、できるだけ広めに情報をまく（その手段は問5-2で多かったものを中心に）ことと、初心者向けの講座であれば、実際の活動に参加して貰うために、次に何をしたいかを考えてもらえる、具体的に次が見えてくる（繋がる）ような講座を心がけたい。

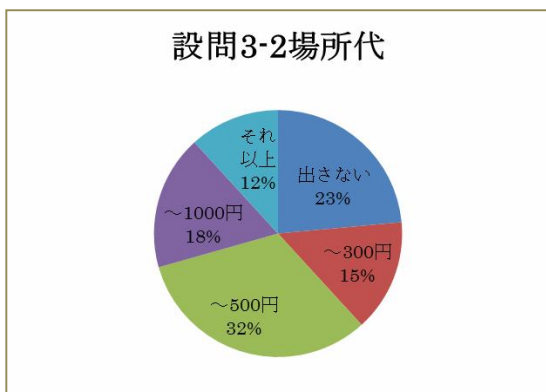
問3 「モノ・場所」について（設問数：2）



活動をする上で、「全市的な活動場所」「身近な活動場所」「備品・設備」の中から、最も必要な物的資源は何かを尋ねた。また、活動場所の使用料についても尋ねた。

狙いは、今後社協が意識して充実を目指していくべきモノ・場所は何なのか知ることに

2012年7月17日



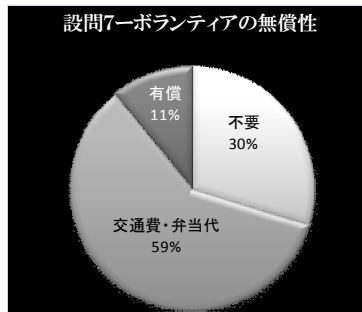
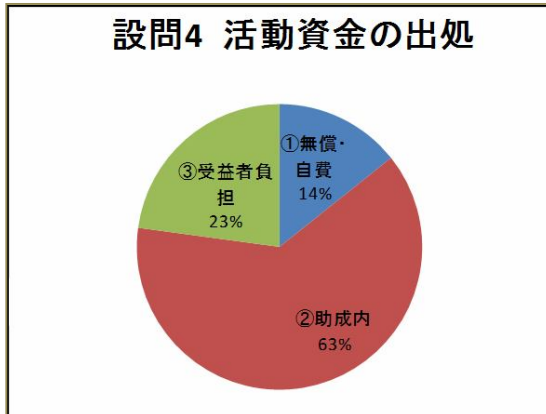
ある。また、そのモノ・場所にくらまでお金が出せるかを知ること、より効率的に整備を進めたいと考えた。整備をしても結果的に使って貰えなかったということを防ぐためである。

我々は本設問において、「身近な活動場所」が最も必要。近所に無料で気軽に借りられる活動拠点が欲しい—という回答が多いのではないかと仮説をたてていた。

結果は予想どおり、8割近くが「身近な活動場所」と回答。地域に根ざしたボランティア活動をイメージして回答している人が多いことがわかった。

また、場所代をいくらまで負担できるかという質問については、出たくない人が約2割、500円までが5割弱という結果になった。「活動によって異なる」という記述をした上で答えている人もいた。近くにあって集まりやすく、なおかつ500円以内(活動内容等によって異なるが、安ければよりよい)で借りられる活動場所の確保が、ボランティアセンターの仕事の1つになると感じる。

問4 「活動資金」について(設問数:2)

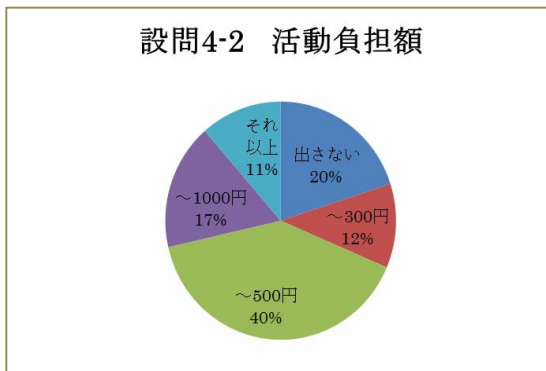


ボランティア活動におけるお金のあり方について尋ねた。

志願兵から始まり、「無償

の奉仕活動」として自分の持つものを差し出すことがボランティアだとされた時代を経て、現在では、有償ボランティアや、交通費・助成金が出る活動もボランティア活動として認知されるようになった。本設問の狙いは、そんな中、市民はどの程度まで金銭を負担できるのか。その金額は、経験者と未経験者で異なるのかを探ることにある。

また、市や社協にどの程度自分たちの頑張りを評価して欲しいと思っているのかも知り



いと考えた。

2012年7月17日

我々は、無償・自費で活動したいとする人は少なく、市や社協の助成の範囲内で活動したい人が多く、場所代よりも、活動費用の方が負担できる額が高くなるのではないかとこの仮説をたてていた。

また、受益者負担と考える人はとても少なく、未経験者の方が、無償・自費で行うものであると考え、経験者は、ボランティアをある種の「委託事業」のように捉えているのではないかと考えていた。

結果、6割以上が活動資金を公的な助成で賄いたいと考えていた。やはり、経験者の方が未経験者よりも「無償・自費」で活動したいと考える人が少ない。「活動とは無償でやるもの」という考えがあって、活動に参加するのに尻込みしてしまう未経験者もいるのかもしれない。

東日本大震災のような特別かつ単発のボランティアには、交通費や宿泊費が自腹であろうが、ムーブメントとして沢山の人が集まる。これに対し、財政状況の厳しい三浦市に、補助金を求めるのは何故なのだろう。お金を出してもいいボランティアとそうでないボランティアがあるということか。これについては、以下(1)～(2)のような仮説をたてた。

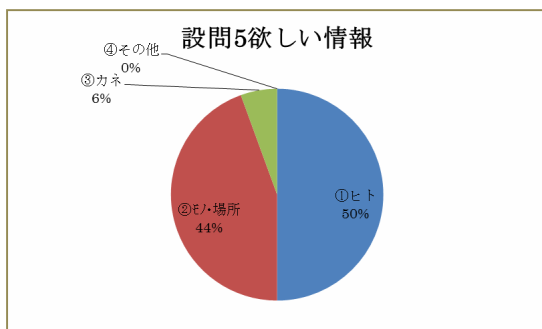
- (1) ずっとあるニーズを満たしていくにはお金がかかる。また、持ち出しだけではニーズを満たしきれない。
- (2) 市政に足りないものを埋めているのだからほぼ委託事業！と思うのか。役割を担っているという事実を認めて欲しいのではないか。

上記(1)～(2)を勘案し、ニーズに応じた活動をしている団体を評価する仕組みをつくるとともに、そうした団体には公的な資金を出すべきだと考えた。一方で、ボランティア精神を最大限尊重し、「無償でも構わない」とする団体には、資金援助以外の支援を構築すべきだと考えた。

なお、活動の負担額は、場所代の負担額と同じような分布になった。

問5 「情報」について(設問数:2)

本設問の狙いは、最も得たい情報を、最も伝わりやすい媒体で広められるようにすることである。もう一点、ボランティア活動を実践するにおいて、最も得たい情報は何かを探りたいと考えた。ここで我々は、得たい情報は活動内容によって異なるので、バランスよく分かれるのではないかとこの仮説をたてた。

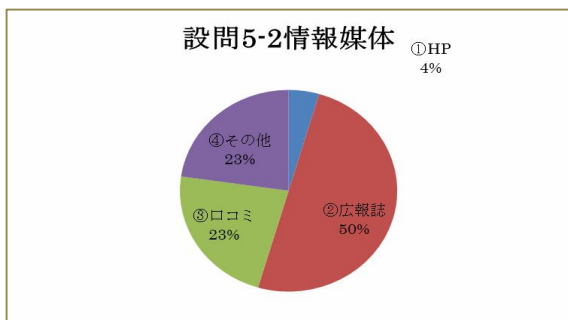


く分かれるのではないかとこの仮説をたてた。

結果、①ヒトと②モノ・活動場所に意見が集中した。

個人で活動している人にとっては、活動助成金などは縁遠いもので、「団体向けのお金の情報を貰っても、関係ない」と感じるのかもしれない

2012年7月17日



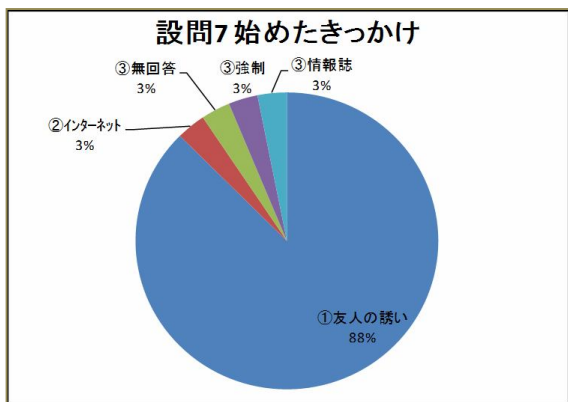
ない。活動団体に所属する人に絞って聞いたら、「③カネ」と答える人の割合は増えると思う。

問2では、「講座を受けたことがない」人が約8割にも上ったが、「①ヒト」(講座など)の情報を知りたい人が最も多かった。

次に、普段ボランティアに関する情報を

何で得ているかについて尋ねた。

ここでの仮説は、実際の活動に結び付いている人は、口コミで情報を得ている人が多い—というものである。現在三浦市内のボランティア活動に関する情報が集中しているようなHPのサイトがない。そのため、年代によっては目にする機会も多いかもしれないが、何となく尻込みしてしまい、活動の実施には漕ぎ着けにくいと考える。



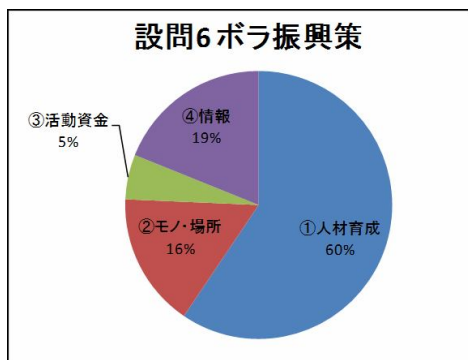
また、活動を始めるきっかけ(設問7)として、「①友人・知人の誘い」が多いと予想している。そのまま友人・知人から情報を得て、一緒に行くことが多いのではないか。

結果、広報誌が半分を占めた。口コミは23%で次点。設問7では、やはり「①友人・知人の誘い」が88%と多く、「情報誌(③その他)」の回答は3%に過ぎなかった。活

動の2回目以降は、地元の広報紙で、身近な地域の活動を探して、自力で参加に至る人が多いということだろう。

社協の仕事としては、HPの充実を図り、その効果を測っていくことに力を入れるとともに、今後も広報紙「社協みうら」という紙媒体の情報もおろそかにしてはいけないと痛感した。

問6 最も大切な「ボランティア振興策」とは(設問数:1)



今までに尋ねてきた「①ヒト(人材育成)」「②モノ・場所」「③カネ(活動資金)」「④情報」の中で、今最も充実させるべきはどれなのかを問うた。

狙いは、計画での実行の優先順位を考えることにある。

ここでの仮説は、「②場所」「③カネ」の順位が高い。「④情報」の潜在的ニーズは高いが、充実したことによる利益が想像し辛く、結果にはあまり響か

2012年7月17日

ないというものであった。

結果、「①ヒト(人材育成)」が6割を占めた。

普段から人材不足に関する話を多く耳にしていたため、今思うと全く当然の結果だと思う。しかし、現在の社協からボランティア活動団体への決まりきった支援としては、細かい審査を行う「助成金申請事業」があり、それについて直接的な意見(「去年より他の助成額が少ないので減らさないで欲しい」「この助成金をなくされると困る」等)を聞いたり、申請書類から読む機会がある。それらの意見は全てが結果に反映されないにしても、必ず「助成金申請事業」における意見である、と判断される。

一方「人材育成の促進」についての意見は、耳にしても、「実際にこういうことを社協で行う」という、現実的な「事業」にまで結び付かない。また、「人材育成」に近いようなことを社協でやっても、結果が見えにくい。感想が出ても、該当事業(受け皿)がなく、何とはなしにスルーされてしまう。

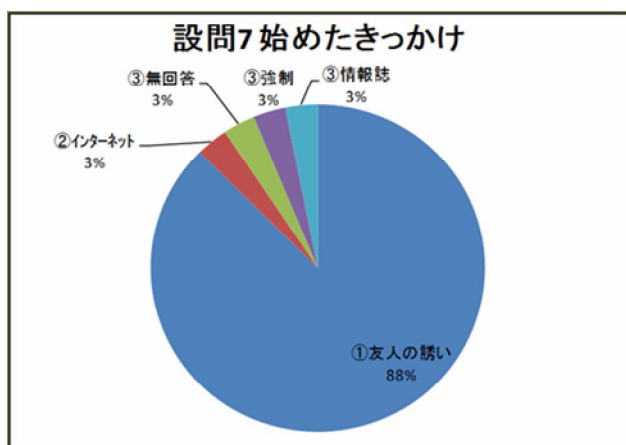
それぞれの団体が講座を主催していることも多々あるが、新しい参加者が少ない、あるいは、みんなが何となく持つ「人材が、育成された像」にはなっていないということか。1つやったらやった気になるが、それだけでは「育成された像」にはなっていないということか。

直接的な「人材育成」事業があれば、話の中に出てきた意見も、現実的に受け止められたような気がする。(でも、その中身とかについてはいま謎。問2を以てしても謎。)

また、それぞれの団体にできる講座(手話とか) 同士とか、社協の講座とを、上手いこと繋げて、ステップを作る支援も必要になるかもしれない。

「④情報」のニーズは意外と高い。設問5で分かった情報も流したい。

問7 きっかけについて(設問数:1)



ボランティア活動を始めたきっかけについて尋ねた。

狙いは、実際に活動をしている人がどうやって活動を始めたのかを聞くことで、未経験者をどのように活動へ誘うのが有効なのかを探ることができるのではないかと考えた。

ここでは「①友人・知人に誘われて」とする回答が最も多いのではないかとという仮説をたてた。何かを始めると

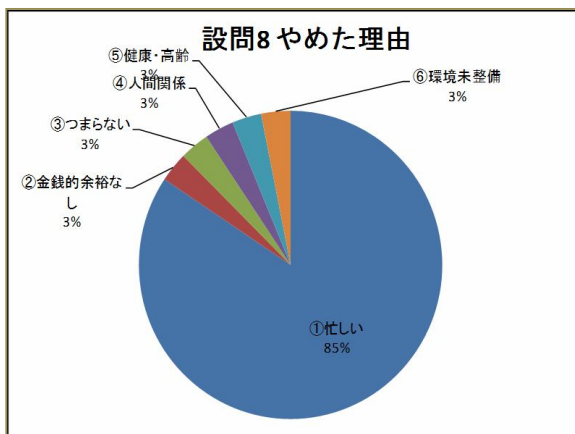
ときには、誰かに「大丈夫」と背中を押して貰わないと踏み出しにくいのではないかと。若い年代であれば、授業の一環などで強制的に始める人が多くなる。

結果、予想どおり「①友人の誘い」が最も多く、およそ9割を占めた。始めるきっかけ

2012年7月17日

としては、興味を抱いている未経験者が、①経験者にとって、「やってみない？」と誘われること、②潜在的に興味を抱いている人同士が会って、「一緒にやってみよう」となること一など、人に結び付くことが、実際の活動に踏み出しやすくなるきっかけになることが考えられる。

問8 やめた理由について（設問数：1）



ボランティア活動をやっていた人に、活動をやめた理由を尋ねた。

狙いは、どのような状況であれば、活動を続けられるのか、始めやすいのかを知り、ボランティア需給の調整に役立てることにある。

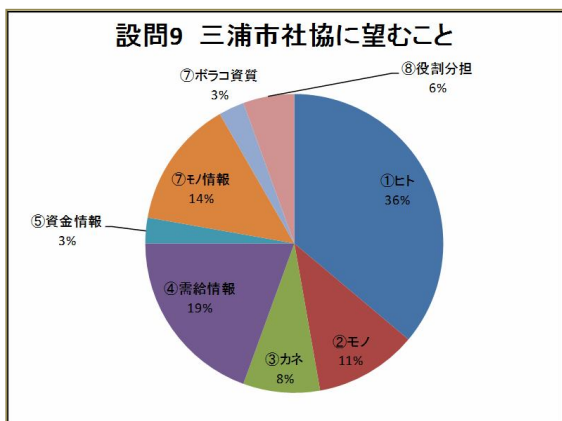
ここでの仮説は、アンケートに答えられる人の中となると、「①忙しい・暇がない」が多いというものであった。

潜在的には、高齢になっても長く活動を続けている人をよく目にしており、市内の高齢化率も29.89%（H24年6月1日現在）と高いため、「⑤健康を害した・高齢になった」人も多いのではないかと。また、「③つまらなかった」「④人間関係のもつれ」も、答えにくい但实际上にはよくあるのではないかと。結果）85%が「①忙しい」と回答。それ以外はそれぞれ1人（3%）ずつ分布。

団体から「若い世代の参加が望まれる」という声をよく聞くが、難しそうだと思ってしまった。ある程度時間に余裕がないと、継続的な参加は難しいようだ。

それでも、「忙しくなるまでは活動をしていた」ということなので、この人たちは、もしもまた「暇」ができたときには、「ボランティアをする」という選択肢を持っていて、選び得る人々なのだ。そう考えると、より若い世代（中学生～大学生など）への情報提供も必要な支援であるといえるのではないだろうか。

問9 社協に望むこと（設問数：1）



ボランティアセンター（三浦市社協）に最も力を入れて欲しいことは何なのかを尋ねた。

狙いは、情報、ヒト、モノ、カネ、ボランティアセンターという、計画の柱に据えたいと考えている機能が、市民にとって本当に必要とされているのかを知りたいとおいうもの。また、計画における、実行の優先順位を

2012年7月17日

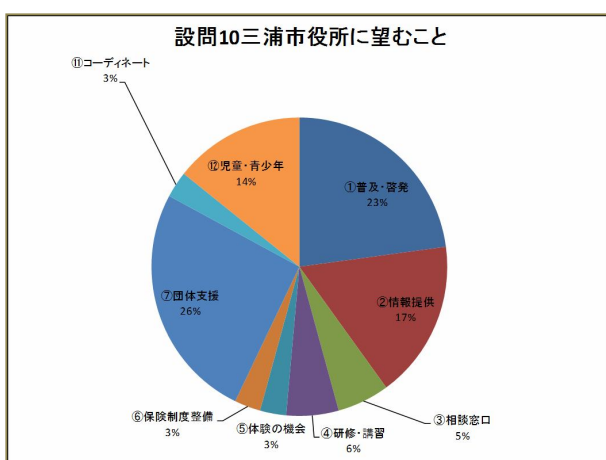
つけたい。

仮説は、「③カネ」か「④情報(人材需給調整)」が多く、市(問10)とは何となく異なる分布になる—というもの。しかしながら、普段ボランティア活動において、「市」と「社協」の違いを意識する機会がないので、今必要であると考えている(市や社協など)他からの支援の中の、ベスト1と2を両者に振り分けようとするのではないかな。

結果、「①ヒト(各種講座の開催など、人材育成)」と答えた人が3分の1以上となった。そして「④需給調整に関する情報」、「⑦施設設備・活動場所の情報」と続いた。

問6での考察と同様に、「③カネ」についてはそれ程意見が多くなかった。

問10 市役所に望むこと(設問数:1)



狙いは、市民が(何となく)抱く「市が担うべき役割」が何かを知り、三浦市社協との役割分担を考えることにある。

ここでの仮説は、「①市民への普及・啓発」「⑦ボランティア団体への支援(活動場所の整備や活動資金の補助等)」が多いというもの。耳なじみの薄い「社協」よりは、「公」の方に、人手不足解消のための広い範囲への呼びかけをして欲しいと思うのではないだろうか。

結果、「⑦ボランティア団体への支援(活動場所の整備や活動資金の補助等)」26%、「①市民への普及・啓発」23%、「②HPや情報紙によるボランティア活動の情報提供」17%と続いた。

設問9-10の考察

ベスト1だけを見ると、社協には人材育成、市には活動場所の整備や資金補助などの広い意味での団体支援を求めている、という結果になった。

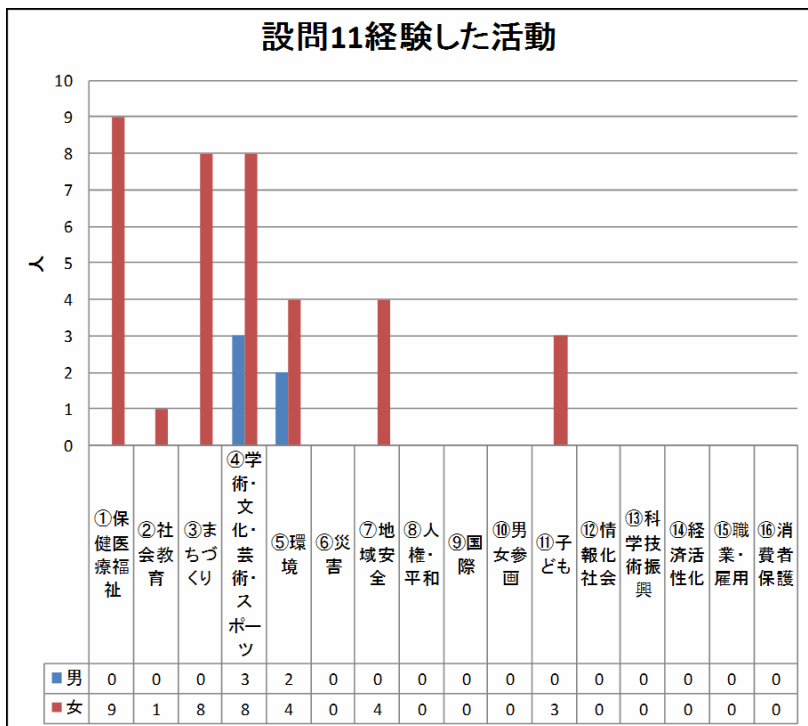
しかし、質問項目の微妙な違いや、設問9で述べた考察のとおり、両者に求める支援に、絶対的な違いというものは見られないのではないだろうか。

計画の柱をいったん置いておいて、全く同じ項目で調査をしてみるべきだったかもしれない。

とはいえ、優先して充実させて欲しい項目というものは「人材育成・啓発」「人材の需給を中心とした情報提供」である。また、具体的に何、という訳ではないが、市民は範囲を限定しない「団体支援」を必要としていて、「公は関わるべきでない」と考えている人は少数派になる(今回は0%)。ボランティア活動を、(社協も含め)公の見守り・支援があって行きたいものであると捉えている。その何となく自立したくない理由とは何か。(リスク配分。面倒くさい。不安。)でも、そこから、自立させるための支援というものも必要になってくる、ということも分かった。

2012年7月17日

設問11 ボランティア活動の種類について(設問数:1)



今やっている、あるいは以前やっていた活動の種類について尋ねた。

狙いは、こういった種類の活動が参加しやすいのを知り、新しい人の「きっかけ」となりやすい活動は何かを考えることにある。

ここでの仮説は、男女で分布が異なる。女性は「①保健医療福祉」と「⑪子ども」、男性は「⑥環境保全」が多いのではないかと。女性は、自分の子育ての経験を活

かしたボランティアをしたいのではないかと。また、ボランティア=福祉的なものというイメージで活動を探す人も多いと思う。社協に登録している団体に福祉的なボランティア活動団体が多く、所属している人に女性が多いのを目にしている。

男性は、仕事の都合などで、継続的なボランティアよりも単発のボランティアの方が参加しやすいのではないかと。また、福祉的なボランティアよりも、環境保全のボランティアに、男性をよく見かける気がする。

結果、女性には「①保健医療福祉」「③まちづくり」「④学術・文化・芸術・スポーツ振興」が多かった。男性は、母数が少ないが、「④学術・文化・芸術・スポーツ振興」「⑥環境保全」がいた。

「④学術・文化・芸術・スポーツ振興」が男女ともに多かった。やったことないことから入るよりも、楽しく「自分にできることを手伝う」というきっかけから入る方がやりやすいのかもしれない。

保健医療福祉の関心も高かった。

今後広く市民向けにとると、「⑥災害救援」のボランティアの割合は少し増えると思う。

終わりに

- ・とにかく人材育成・普及啓発をして欲しい
- ・それについての広報は広報紙を中心に
- ・未経験者が誰かと出会って結束できる機会をつくる
- ・女性多め(これは市民回答もきつこうなる)、年齢層バランス偏っていたため、市民と

ボランティア(市民活動)に関する意識調査結果報告書

2012年7月17日

は少しはなれるところがあるだろう(情報の得方、講座が結び付いたか、経験した活動種など)

- ・活動資金に関するニーズが低いのは何故か?
- ・きっかけに適した活動は
- ・自立して貰う支援とは

2012年7月

発行/社会福祉法人三浦市社会福祉協議会 事務局長 出口道夫

文責:社会福祉法人三浦市社会福祉協議会 地域福祉課 主事 杉崎悠子

〒238-0102 神奈川県三浦市南下浦町菊名 1258-3 三浦市総合福祉センター

TEL 046-888-7347 FAX 046-889-1561